

此三友骨に徹し忘るべからず

奨励	望月 修治【もちづき・しゅうじ】
奨励者紹介	日本キリスト教団牧師

「これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるためである。わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人が何をしているか知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼ぶ。父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせたからである。あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である。」

(ヨハネによる福音書 15章11-17節)

男児志を決して千里に馳す

北海道・函館の観光スポットで、海鮮市場やお土産店、レストラン、雑貨店が軒を連ねている西波止場に新島襄の全身のブロンズ像が立てられています。函館ウォーターフロント計画によって函館市が2002年に設置しました。その西波止場から海に沿って少し行ったところに、「新島襄海外渡航乗船之處」と刻まれた碑があります。1954年7月に同志社が設立しました。この碑には「渡航」とありますが、実態は鎖国下にあった幕末の日本からの脱国ですから、密出国にほかなりません。捕らえられれば犯罪者として処分されます。そこまでして、なぜ脱国しようとしたのか、その動機は、函館を出てアメリカに渡る途上、上海に入港した時に新島が作詞した漢詩から窺い知ることができます。

「男児志を決して千里に馳（は）す
自ら苦辛を嘗（な）む あに家を思わんや
却（かえ）って笑う春風雨を吹く夜
枕頭（ちんとう）尚夢（ゆめ）む故園（こえん）の花」

(『千里の志 新島襄を語る(一)』 本井康博著 思文閣出版 2005年 202頁)

男子が志を決めて、千里も遠くへ行く、自分から苦心を嘗め、家のことなど思いたいが思っていられない。しかし、春風が吹き雨の降る夜は、なお故郷の園の花を夢にみる。

新島はこの漢詩が気に入っていたようです。明治の日本に帰国して10年余り経ってからこれを清書して書き残しました。記念碑にはこの清書が新島の筆跡通りに刻まれています。

大切なのは最初の行に刻まれた言葉です。「男児志を決して千里に馳す」ここに詠われた「志」と「千里」、「千里の志」です。これが同志社へとつながるのです。新島は封建社会を「暗黒世界」、そして暮らしていた安中藩の狭い江戸藩邸を「閉じ込められた閉鎖的世界」と捉えていました。そこからいかに脱出するか、青年新島はそのために頭を巡らしました。そして夢見たのは、自由を得るために「千里」の果てにまで突き進むことでした。これが江戸、そして函館を出る時の想いでした。

1864年函館から脱国し上海を経て、1年かけて新島はボストンに入港します。大西洋を横断したのですから「千里」どころか「三千里」の距離を走ったことになります。そして着いたところが、封建社会の日本に比較すれば、文明社会そのものであったアメリカだったわけですから、新島の「千里の志」はひとまず実現したことになります。アメリカでは8年間を過ごすことになりますが、そこでの日々は思いをはるかに超えるさまざまな、そして奥深い体験を新島にもたらしました。そして1874年に明治の日本に帰国し、同志社設立へと至ることになります。

新島の函館物語

今週はOshisha Spirit Weekですから、新島のアメリカ時代、あるいは帰国後の同志社設立にまつわる出来事を語るのが本筋かもしれませんが、本日は時計を少し巻き戻して、脱国前の函館での出来事、新島の函館物語に焦点を当ててみたいと思います。

新島は北海道が好きでした。理由は大きく二つあると思います。ひとつは、青年時代に、窒息しそだった安中藩邸での生活、実に不自由な江戸幕府の封建体制を嫌って、自由を求めて脱国したのが函館であったことが挙げられます。そしてアメリカに渡ったことが、自身の後半生に自由な人生をもたらす契機となったという自覚が北海道への特別な思いとなったと言えます。北海道・函館は「閉塞状態からの出口」すなわち「自由への入り口」となったのです。帰国後に設立した同志社で問題が起きたとき、新島は弱気になり「学校長をやるよりも、田舎で牧師をやりたい」としみじみ語ったと言います。「同志社を辞めて、北海道へ行って、開拓伝道をしたい」と語ったこともあったということです。「田舎牧師」は新島の夢であったようです。「田舎」と語るとき新島が思い巡らしていたのは、とりあえずは北海道のことでした。田舎伝道に地道に従事し、アメリカで体験した「自由の王国」を日本にも実現したいという思いがありました。具体的には「北海道をニューイングランドに」という夢を新島は抱いたのです。

もうひとつ、新島が北海道に特別な思いを抱いたのは、函館から脱国する時に、それを手引きし、支援してくれた人たちがいてくれたことへの深い感謝であったと思います。密出国の手引きをしてくれた日本人が三人います。菅沼精一郎、沢辺琢磨、そして福士卯之吉（後に福士成豊）です。新島にとっていずれも初対面の人たちです。彼らとの出会いの次第は、大筋次のようです。新島は函館へ行く許可を藩から取るために、修行するために函館へ赴く、と届け出ました。修行先の塾は武田塾といえます。奉行所が設立した塾です。武田塾の塾頭であったのが菅沼精一郎という人物です。江戸からはるばる北海道までやってきた青年に菅沼は何か心が動かされるのを覚えたのだと思います。骨を折って、新島にロシア領事館付きの司祭ニコライを紹介してくれました。新島はニコライの日本語教師となり、ニコライの家に移り住みます。さらに菅沼を介して、宮司でのちにキリスト教の洗礼を受ける沢辺琢磨（坂本龍馬のいとこで、龍馬と琢磨は年齢が同じであったので親交が深い間柄であった）と出会います。さらに外国人居留地の英国ポーター商館の書記で英語が堪能であった福士卯之吉と知り合います。福士卯之吉は日本初の洋式商用帆船・函館丸の建造に関わった人物です。ちなみに、函館丸は函館市内の陸地に復元され1988年から公開されています。新島はこの福士の助けを借りて、一艘の小舟で沖に出たのち、函館湾内に停泊するアメリカ商船ベルリン号にたどり着き、脱国に成功します。小舟を操って新島をベルリン号に運んでくれたのは福士卯之吉ですが、彼は非常に慎重で、わざわざ小舟を借りて、三日間もハーサルをした、といえます。後に新島と福士とはお互いに真の友と認め合うつながりを持つことになりました。英語が堪能で欧米の先進文化に触れていた福士は、自由を求め危険を冒してまで脱国しようとする新島の志に共鳴し、欧米の文化を知り、身をもって味わうことの価値が分かっていたからこそ、自らもまた危険を冒して小舟を操って、函館湾に漕ぎ出したのだと思います。

不思議な出会いです。そしてこの三人と出会わなかったら、新島が脱国し、その後の半生に大きな転換が起こることはなかったかもしれませんし、同志社も存在しなかったかもしれません。菅沼精一郎、沢辺琢磨、そして福士卯之吉、この三人がつながり、函館でこの三人と出会えたことを新島は「骨に徹し忘るべからず」と語りました。「骨に徹し」と語る、それはこの出会いの持つ意味の深さを新島も身にしみて分かっていたことを示しています。

人はそれぞれの道を歩んで今を生きています。人生という舞台上でいろいろな出会いを体験し、生きる方向が定められてもきました。しかし、そのような出会いの時機がいつ訪れるかは、人の自由にはなりません。生き方を問われ、向き合い、行くべき道はこちらだと納得させられる、そのような出会いを人は求めます。その時に大切なのは待つことだと思えます。待つことにこそ、意味がある。なぜなら待つということは、見えない働きが訪れる、そして、それを体験するために必要な営みだからです。人と人とが会おう、そこにはきっと深い神の意図があるはずなのです。そのことを新島の函館物語を入口として、聖書の世界に思いを広げて考えてみたいと思います。

つながり合うことの意味

本日の聖書箇所として、ヨハネによる福音書15章を司式者の方に読んでいただきました。福音書記者のヨハネは15章で、人が誰かと出会い、つながり合うことの意味深さを、ぶどうの木に喩えて語っています。5節です。「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしとつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。」ぶどうはキリスト教のシンボルの一つです。

ヨハネ福音書では13章から、イエスが十字架にかけられる時が迫る中で、弟子たちと最後の食事を共にしたという「最後の晩餐」での出来事が物語られています。この食事の席で、イエスは弟子たちに語りかけるのですが、今日の箇所のぶどうの木の話もその時にイエスが語ったという設定になっています。イエスは神と自分と弟子たちとの結びつき、つながりをぶどう園の農夫と、そこに植えられているぶどうの木、そしてその木につながっている枝という、当時のユダヤの人々にとって、親しみのある情景を具体的な例として挙げながら語っています。ここでイエスは、弟子たちはぶどうの木につながっている枝なのだと語っています。枝の生命は幹に依存し、根と幹によって供給される養分によって枝は葉を茂らせ実を結ぶことができる、それが命の仕組みです。枝は自らの力で育ち生きているではありません。

けれども、わたしたちがぶどう園と言われて思い浮かべるのは葉を茂らせた枝であり、そこに重く垂れ下がっているぶどうの実です。ぶどうの木や幹、ましてや農夫の苦勞に最初に思いが向けられることは、まずありません。収穫期を迎えたぶどう園の主役は、ぶどうの木の枝とそこにたわわに実った多くの実です。木の幹や、その木をずっと手入れし、苦勞を重ねてきた農夫の姿は背後に押しやられてしまいます。特に農夫についてはそうだと思います。ぶどうの木に芽が付き始めるのは3月です。枝を伸ばし、花を咲かせやがて青く堅い実が付きはじめると、そ

れに合わせて農夫は枝を剪定し、木の周囲の畝を手入れし、除草作業を行う。加えてぶどう畑を獣や盗人が入り込んで荒らさないように気を配る。この作業は、暑くむせ返るような夏の最中にも休むことなく続けられます。この労苦の多い働きが積み重ねられた上に、ようやく豊かな実りが生み出されます。にもかかわらず、農夫の汗と労苦と忍耐は表にその形を刻むことなく、収穫期のぶどうの実は背後に隠れていくのです。聖書はこの隠されている世界に思いを向けることを促します。その促しが「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」という言葉には込められています。

相手の中に住む

そして、イエスはそのような枝であるわたしたちに「わたしにつながっていないさい」「わたしの愛に留まりなさい」と繰り返し語りかけます。「つながっている」の原意は「留まる」です。「つながり」と言われると、体や心の一部につながっていても、「つながっている」ということになるとも考えます。わずかな糸でつながっている、それでもいいと考えるということもできるかもしれません。しかし、ここでいう「つながっている」というのは、相手の中にいる。相手の中に住む、住み続けるということです。芥川龍之介の「蜘蛛の糸」のようなわずかな糸でつながっているということではありません。

相手の中に住むということ、それを12節で次のように表現しています。「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい」。加えて16節で大切なことが語られます。「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」。互いに愛し合う、しかしそこには順序があるということです。愛には明確な順序があるということです。それは決して逆転できない順序です。人は初めから命の中に愛を抱いて生まれてくるのではないということです。愛はまず自分の外から届きます。両親や周囲の人たちから愛を注がれることによって、つまりまず愛されることを十分に味わって、はじめて人は愛することの大切さ、愛を注ぎ出すことによって味わう喜びの深さと意味を体得していくのです。ですから、イエスはまず「わたしがあなたがたを愛したように」と言うのです。そしてそのことをあくまでも前提として「互いに愛し合いなさい」と語るのです。

そしてさらにイエスは言葉を重ねます。14—15節です。「わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。もはや、わたしはあなたがたを僕（しもべ）とは呼ばない。僕は主人が何をしているか知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼ぶ。」あなたがたを友と呼ぶ、その理由は、主人が何をしているか知っているからだといエスは語ります。今日の箇所、主人が何をしているか知ることとは、「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」と表現される命の基本を受けとめることです。そのことをきちんと知って生きる、体験し納得して生きる、そのことの意味深さに気づいて生きていこうとする人を僕（しもべ）ではなく、友と呼ぶといエスは語ったのです。

生きてみること・歩いてみること

批評家であり随筆家でもある若松英輔さんが、井上洋治さんとの深い出会いについて書いておられます。井上洋治さんは2014年に亡くなりましたが、カトリックの司祭で、優れた神学者、思想家でもあった人です。井上神父は日本人に西洋の神学を押し付けるのではなく、日本人の心に直接響く言葉を探し、紡ぎ出した人です。イエスに関する知識ではなく、イエスの心を伝えたいと願い、心から心に伝えたい、としばしば語りました。その井上神父が教えてくれたのは、生きるとは何かということだったと若松さんは書いています。人生の道をどう歩くかではなく、歩くとはどういう営みであるかを教えてくれたということです。

若き日に、若松さんは井上洋治さんと出会いました。そして聖書のどこを読んでも自分は光を見つけれない。そればかりか自分が救われないことだけがはっきりしてくる。そう語り、矛盾したことが述べられている箇所を挙げ、数十分にわたってひとりで話し続けたことがありました。黙って聞いていた井上洋治さんは、こう言いました。「今日は、とてもすばらしい話を聞かせてもらいました。ありがとうございます。しかし、ひとつだけ感じたことがある。信仰とは頭で考えることではなく、生きてみることではないだろうか。知るのではなく、歩いてみるのではないだろうか。」

この一言がわたしを変えたと若松さんは言います。

宗教は考えて理解するものではなく、行為として生きて体得するものです。たとえてみれば、山の頂上にむかって歩んでいく道であるといえます。人は二つの道を同時に考えることはできません、同時に歩むことは決してできません。人生の意味は、生きてみなくては分かりません。素朴なことですけれども、大切なことです。新島の函館物語からそのことを思わされました。

2021年6月9日 同志社スピリット・ウィーク春学期
今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録